

## 「もう読みたくない本」

### 狸寝入り

誰にでも愛読書はありますよね。半年ほど前にこの月報に宮部みゆきさんの作品が紹介されておりましたが、私もたまたま高校が同じという事や題材を深川に取った作品も多く親近感もあり、何冊か読んだものでした。読者をあきさせず、一気に読める作品ばかりでした。

今回は感銘を受けたにもかかわらずもう二度と読みたくない本を三冊紹介します。この三冊は再読しようとしても目頭や胸が熱くなって、辛くて読めないのです。この三冊とも映画化もされた有名な作品で、誰でも知っていると思いますが、あらすじだけご紹介しておきます。

#### 「ホタル帰る」(赤羽礼子 石井宏著)

終戦間近、陸軍特攻基地の知覧から出撃する若い兵士の世話をした旅館の女主人と、特攻兵士の交流を描いた実話です。ある兵士は出撃前に庭に飛ぶホタルを見つめながら「小母ちゃん、俺、このホタルになって帰ってくるよ」と言い残して散華<sup>さんげ</sup>して行きました。そしてその夜、そのとおりホタルが旅館の部屋の中に舞いこんできたのです。私にこの兵士たちと同世代だった材木屋の長老が声をつまらせ、感極まった声でこのエピソードを話してくれたことがありました。この時のことは深く心に残っていて、今でも忘れられません。写真のように屈託なく微笑んでいる当時の若者が明日は死んでゆく、こんな悲惨な体験はこの長老には一生の心の傷として残っていたのでしょうか。



特攻兵士に囲まれている「特攻の母」鳥浜とめさん

### 「鉄道員」(ぼっぼ屋) (浅田次郎著)

浅田次郎氏が直木賞を受賞した短編集のひとつです。雪深い北海道の廃線間近な駅の駅長の前に、赤ん坊の時に亡くした女の子が、小学生に成長した姿で現れるのです。駅長は当然この彼女が自分の子供とは思いません。近所の子供が遊びに来たのだと思っていました。次の日にはその小学生の姉の女学生が、昨日妹が忘れたセルロイドの人形を取りに現れます。そしてこの女学生は慣れた手付きで食事を作ってくれたり、駅長と鉄道談義をしたりしているうちに、駅長は彼女の仕草が亡くなった妻にそっくりなのを感じ、ついに駅長はこの女学生も、昨日の小学生も、赤ん坊の時に死んだ娘だと気づくのです。娘はそれにたいして「お父さんには何も親孝行出来ずに死んでしまったでしょ、だからこうやって来たの」

次の朝、老駅長は雪のプラットホームで亡くなっているのが発見されました。

私の文章力では上手く表現できませんので、興味がわきましたら30頁ほどの短編ですからどうか原作をお読みください。この作品も辛くて二度は読めない1遍です。



亡くなった娘とは知らず談笑する老駅長

### 火垂るの墓 (野坂昭如著)

またホタルです。この作品は野坂昭如の直木賞受賞作で、ジブリの高畑勲のアニメで何度もテレビ放映された有名作品ですが、一応あらすじだけ紹介しますと

「戦後間もない昭和20年9月、国鉄三宮駅の構内で栄養失調で死んだ浮浪児の清太と、4歳の妹節子の死までを独特な文体で描いた短編小説です。二人は防空壕を住処にして、その横穴で灯りがわりにほたるを捕まえて蚊帳の中に入れてかろうじて生きていたましたが、しかし節子はやがて死に、茶毘にふされ、その火が燃えてきた時、まわりにはおびただしいほたるの群れが集まり、節子はこのほたと一緒に天国へ行くのだと清太は思った」

こんな悲惨な時代が70年ほど前の日本には本当にあったのです。こんなことが決してくり返されない世の中にしたいものです。この作品も30頁ほどの短編ですからぜひ原作でお読みください。



ひもじさのなかでも健気に仲良く遊ぶ兄と妹

以上これらの三篇は悲しすぎる作品で、月報に載せる記事としては不向きかもしれませんが、後世に語り継がねばならない作品だと思い投稿しました。是非とも原作でお読みください。